

Title	言葉を理解するとはどういうことか? : §10 問いと答えの意味
Author(s)	入江, 幸男
Citation	
Version Type	AM
URL	https://hdl.handle.net/11094/14266
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【最終レポートについて】

課題テーマ:講義内容に関係したテーマを自由に設定してください。

必ず魅力的なタイトルをつけてください。

(例えば、講義で言及した文献を読み、その一部を紹介して分析してください。)

分量:4000字程度、英語ドイツ語の場合 ca. 1600 words)

書式:A4用紙、横書き、40字30行、本文12point、注は脚注、参考文献リストは文末。

フォント明朝、欧文の場合、New Times Roman、上下左右のマージン20mm

提出先、文学玄関入江のメールボックス(郵送可、大阪大学文学研究科、入江幸男宛)

締め切り、8月25日。

【前回の復習】

前回から、入江が現在考える意味論の話 시작했다。これまで話した真理条件意味論、主張可能性意味論との関係は、もう少し説明を進めた後にする予定である。

1、文の焦点は、問答関係で決定する。

「リンゴは赤い」は、二通りの焦点をもちうる。

「(他もでもなく) リンゴが、赤い」

「リンゴは、(他でもなく) 赤い」

この焦点の違いは、これらが次のような異なる問いに対する答えとして使用されているからである。

「何が、赤いのですか」 「(他もでもなく) リンゴが、赤いです」

「リンゴは、何色ですか」 「リンゴは、(他でもなく) 赤いです。」

このような事実に基づいて、次のテーゼを証明した。

2、コリングウッド・テーゼ

CT「すべての言明は、それが答えとなる質問への関係においてのみ意味を持つ」

§ 10 問いと答えの意味

言葉の使用法として、「文」(sentence)と「命題」(proposition)と「言明」(statement)の関係は、文の意味が命題であり、平叙文の発話が言明であると見なされることが多い。これと同様の仕方、「疑問文」と「問い」と「質問」の関係を考えている。つまり疑問文の意味が問いであり、疑問文の発話が問かないし質問(他者向けれた発話の時)であるとしておきたい。

我々は疑問文を補足疑問文と決定疑問文に区別できる。補足疑問文とは、「何」「どれ」「どこ」「いつ」「なぜ」「どのように」「どれだけ」などの疑問詞を用いる疑問文、英語でいうwh-questionである。決定疑問文とは、英語で言うyes-no-questionである。補足疑問文の発話と決定疑問文の発話をそれぞれ「補足疑問」と「決定疑問」と呼ぶことにしたい。

ここでは、CTに基づいて問いと答えの意味について、次のテーゼを主張したい。

問答の同一指示テーゼ

「問いは指示を求めており、答えは、問いとの繰り返しを避けたその最も短い形式を考察するならば、問いが求めている対象の指示を与えている。したがって簡潔な言い方をすれば、問いと答えは同一性の関係にある。」

問答の同一性テーゼを証明するために、ここでは補足疑問文と決定疑問文に分けて、それぞれ次のことが言えることを証明しよう。

(1) 全ての問いは指示を求めている。

問いを理解するとは、それがどのような対象の指示を求めているかを理解することである。

(2) 問い求められるものの記述句と答えは、同一対象についての異なる表現である。

(3) 問い求められるものの記述句と答えを結合する完全文は、同一性文である。

補足疑問文と決定疑問文についてそれぞれ以上の3つが証明できるならば、そこから次のことが言えるだろう。

(4) (質問以外の) 全ての言明は、少なくとも潜在的には、同一性文の言明である。

1 補足疑問に関する証明ないし確認

(1) 全ての補足疑問は指示を求めている。

補足疑問文は、フレーゲの言う意味での述語の不飽和によく似た性質をもっており、それを飽和させるために指示を求めている。自問するときの補足疑問は自分で対象を探求しており、他者に尋ねるときは補足疑問は、他者に対象の指示を求めている。これへの返答を自分で見出すときには、対象を見つけている。これへの返答を他者に伝えるときには、他者に対象を指示している。あるいは他者が対象を見出すための手がかりを与えようとしている。どちらにせよ、補足疑問を理解するとは、どのような対象を求めているのかを理解することである。

(2) 問い求められるものの記述句と答えは、同一対象についての異なる表現である。

補足疑問を問われた者が、返答できるためには、補足疑問は返答者がどの対象を指示すべきかを指示しているはずである。なぜなら、そうでなければ、返答することが出来ないからである。つまり、補足疑問は対象の指示を求めているのだが、しかしそれを返答とは異なる他の仕方ですでに示している。つまり、補足疑問と返答は、異なる仕方で同一対象を指示している。次の例で確認しよう。

「世界でもっとも走るのが速い人はだれですか」「ボルトです」

「あなたはどこの出身ですか」「ヨーグルトで有名な国です」

「あの地震が起きたのはいつでしたか」「10年前の明日です」

これらの補足疑問と返答は同一の対象の異なる指示を与えており、それは次の同一性文によって明示できる。

「世界でもっとも走るのが速い人＝ボルト」

「問の受け手の出身場所＝ヨーグルトで有名な国」

「あの地震がおきた時点＝10年前の明日」

補足疑問を発する者が意図していることは、彼が求めている対象を指示する別の表現を求めることではなく、対象そのものにたどりつくことである。返答者がたまたま言葉で返答するとき、問う

ものが、その対象にたどりつくのを助けるための手がかりを言葉で与えているにすぎない。問う者の注意も答えるものの注意も、言葉には向かっておらず対象に向かっている。しかし第三者から見れば、そこに生じていることは、同一性文を共同で作ることである。(同一性文とは、 $a = b$ という形式の文のことである。)

(3) 問い求められるものの記述句と答えを結合した完全文は同一性文である。

上の問答におけるように、答えは、問いとの重複部分を避けて、必要な情報だけ表現することが多い。そこで、問いとの重複をいとわず、問答によってえられる情報を完全に表現した文を、答えの「完全文」と呼ぶことにしたい。例えば「世界で最も速く走る人は誰ですか」の返答は、「ボルトです」だが、その完全文は、「世界で最も走るのが速い人はボルトです」となる。ここでの「・・・は・・・です」(・・・ is ...)という形式は同一性を表しており、「世界でもっとも走るのが速い人＝ボルト」と言い換えられる。上記の3例の返答はいずれも単称名辞である、つまり固有名か確定単称記述である。それゆえに、答えの完全文が、同一性文になることは容易に認められる。「どれ」「誰」「いつ」「どこ」を用いる補足疑問の返答は、多くの場合、単称名辞になりそうだ。

もちろん、「どこに行きたいですか」と問われて「(どこか) 涼しいところです」と答える場合のように一般名辞(あるいは不定単称名辞)が答えになることもある。このときの完全文は「私は(どこか) 涼しいところに行きたいです」となるだろう。これは一般動詞をもつ構文であり、同一性文ではない。しかし、「どこに行きたいですか」という問いに対する答えは、つぎのような完全文として理解することも出来るだろう。「私が行きたいところは、涼しいところです」である。これは主語―述語構文であり、述語は、主語を包摂する普遍的な概念を表現しているようにみえる。もしそうだとすると、これは同一性文ではない。

もしこの問いが、特定の場所を尋ねているのなら、答えは「大山です」というようなものになり、その完全文は「私が行きたいところ＝大山」という同一性文になるだろう。もし「どこに行きたいですか」が特定の場所を尋ねていないのだとすると、その問いをより正確に表すならば、「あなたが行きたいところの特徴はなにですか」という問いになるだろう。そのときには、答えの完全文は、「私が行きたいところの特徴＝涼しいこと」のような同一性文になるだろう。

では、「どこに行きたいですか」という問いの答えの完全文が主語述語文であるためには、問いはどのような問いであればよかったのだろうか。そのような問いは存在しないというべきだろうか。

以下では、その他の主な疑問詞を取り上げて、答えの完全文が同一性文になることを確認しよう。

●疑問詞「なに」をもつ補足疑問を考えよう。

「あなたの好きな食べ物は何か」「たこ焼きです」

この答えは一般名である。この問いが訊ねているのは、対象ではなくて対象の種類であるように思われる。「〇〇屋のたこ焼きです」も「妻のつくるたこ焼きです」のように限定して答えたときにも、これらの答えは一般名を答えている。「昨夜たべたたこ焼きです」は固有名であるが、しかし上の問いにこのような答え方はしないだろう。つまりこの問いは一般名を尋ねている。そこで答えも一般名となり、答えの完全文は次のような同一性文となる。

「私の好きな食べ物＝たこ焼き」

左右とも一般名であり、一般名同士の同一性が主張されている。

次に他の疑問詞「どんな」「どのようにして」「なぜ」を検討しよう。

●疑問詞「どんな」をもつ補足疑問を考えよう。

「馬はどんな生物ですか」「有蹄類です」

この返答を完全文にしようとする通常は次のようにするだろうが、それは同一性文ではない。

「馬は有蹄類です」

ただしこれを次のような同一性文と考えることも出来る。

「馬=ある有蹄類」

ここでは、述語であった「有蹄類」を「ある有蹄類」という不定名辞に読み替えている。

答えの完全文を同一性文と考えるための他の方法もある。もしこの問いを次のように言い換えられるならば、

「馬の生物としての特徴は何ですか」「有蹄類であることです」

この答えの完全文は、同一性文となる。

「馬の生物としての特徴=有蹄類であること」

この返答の「有蹄類であること」とは、「有蹄類性」という抽象的一般名である。書き換えた疑問文の中の「特徴」という語が抽象名であり、疑問文に用いられている指示表現もまた抽象名である。つまり、抽象名同士の同一性が主張されている。

次の例を考えよう。

「ボルトはどんな人ですか」「世界で最も速く走る人です」

この答えの完全文は、同一性文である。

「ボルトは世界で最も速く走る人です」

もし上の問いを「ボルトの特徴は何ですか」と言い換えるならば、その答えの完全文は次のような同一性文になる。

「ボルトの特徴=世界でもっとも早く走る人であること」

この左右は、単称名であり、単称名同士の同一性が主張されている。

●疑問詞「どのようにして」(How)を用いる補足疑問を検討しよう。

「あなたはどのようにやって試験に合格したのですか?」「毎日10時間以上勉強したのです」

この答えの完全文が次のものだとする、同一性文ではない。

「私は毎日10時間以上勉強してその試験に合格しました」

この問いは次のように読みかえられるのではないだろうか。

「あなたが試験に合格したやり方は何ですか」「毎日10時間以上勉強することです」

このように言い換えられるならば、次のような同一性文が成り立つ。

「問いの受け手が試験に合格したやり方=毎日10時間以上勉強すること」

この左右の名詞句は抽象名であり、抽象名同士の同一性が主張されている。

●疑問詞「なぜ」を用いる補足疑問を検討しよう。

「なぜ彼はそうしたのですか」「なぜならお金に困っていたからです」
この答の完全文は、次のどれだとするのがよいだろうか。

①「なぜなら彼は金に困っていたからです」

②「彼がそうしたのは、彼がお金に困っていたからだ」

①は、完全文ではない。なぜなら、問いから独立にそれだけを取り出しても意味が解らないからである。②は完全文になっているように思われる。これは、次のように補うと同一性文となる。

「彼がそうした理由は、彼がお金に困っていたことだ」

しかし、この完全文を答えとすると、先の問題は「かれがそうした理由は何ですか」という問いに書き換えられている。「なぜ」の問いは、原因や理由や根拠を尋ねる問いであるので、「・・・の理由（原因、根拠）は何か」という問いに言い換えられる。方法や原因や理由や根拠は、抽象名であるが、これらの問答ではさらに限定されており、この完全文の主語と述語は抽象名であろうか。

■「どのような」「どのようにして」「なぜ」を用いた補足疑問は、「何」を用いた問いに言い換えられる。これらを「なに」で言い換えた問いが、本来のものであり、それへの答えが本来の答えなのだろうか。それとも、それらは「何」をもちいて言い換えた補足疑問とは、別の問いなのだろうか。

もし前者だとすると、返答のほうも、前者の返答が本来のもので、後者の返答はそれの簡略形であることになる。

「馬は、有蹄類である」

「馬の生物としての特徴は、有蹄類であることである。」

前者の主語と述語は、種概念と類概念という関係にある。前者では、答えの部分は、述語になっている。

「ボルトは世界で最も速く走る人です」

「ボルトの特徴は、世界でもっとも早く走る人であるということです」

前者では、答えの部分は、述語になっている。

「私は毎日十時間以上勉強してその試験に合格しました」

「私が試験に合格したやり方は、毎日10時間以上勉強することでした」

前者では答えの部分は、完全文の副詞句になっている。主語と述語は、個体と一般概念の関係にある。

「彼はお金に困っていたので、彼はそうしました」

「彼がそうした理由は、彼がお金に困っていたことだ」

前者では、答えの部分は、完全文の副文である。

2 決定疑問について

(1) 決定疑問もまた指示を求めている。

上記の問答の理解からするならば、主語と述語のそろった通常の平叙文は、原初的な文ではない。なぜなら、疑問文は平叙文ではないし、また問いへの答えは、通常は問いとの重複を避けたものになるからである。我々が通常の平叙文として理解しているものは、問いとの重複をいとわずに問い

の内容を加えてそれだけで理解できるようにした完全文なのである。完全文は、問答のコンテキストから自立し始めている文であり、特殊な文であることになる。決定疑問文は、いったん成立したそのような特殊な文に依拠しており、いわば二義的に生じる疑問文である。「原初的」とか「二義的」といっても、これは論理的な発生順序の意味であり、現実には幼児はごく初期から完全文に接する。たとえば、母親は「ミルク、ほしい？」などのように訊ねるだろう。幼児は「ミルク」や「ほしい」の一語文の次に「ミルク、欲しい」というような電報文を話すようになるだろう。さて、このように完全文に依拠した疑問文である決定疑問文は、予想される答えを示したものだといえる。

「(他でもなく) この案は成功するだろうか」

「この案は、(他でもなく) 成功するだろうか」

焦点の或る部分が、予想された答えである。

たとえば、「ミルクが欲しい？」という問いは、「ミルクが欲しいか、欲しくないか」を訊ねており、「欲しい」という言葉、ないし「ほしくない」という潜在的に示された言葉の間の選択と指示を求めている。これに対する答えは、相手が示した二つの言葉「欲しい」と「欲しくない」のうちのどちらかを指示するだろう。「ミルクが欲しい？」という問いが求めている指示は、欲しい気持ちか、欲しくない気持ちのどちらか、存在しているほうの気持ちなのではない。存在している気持ちと一致する言葉を指示するように求めている。

このことは次の質問を考えれば明らかになるだろう。「その花の色は、(ほかでもなく) 白ですか」という問いに対して、「白い」と「白くない」という言葉への指示が求められている。「白い色」か「白くない色」の指示が求められているのではない。

決定疑問は、二択の選択問題なのであり、他の選択問題つまり三択問題や四択問題と基本的に代わらない。四択問題においても二択問題においても、返答者は選択肢の中から答えを選ぶ。

「この案の結果は、成功か、否か」「成功である」

「この案の結果は、成功である」

我々が選択肢の中から選ぶ時、どれを選ぶ必要があるのかは、問いの中で述べられているはずである。さもなければ、我々は何を選択したらよいのかわからなくなる。決定疑問を理解するとは、それがどのような選択と指示を求めているのかを理解することである。

(2) 決定疑問における問い求められるものの記述句と答えは、同一対象についての異なる表現である。

我々が選択肢の中から選ぶ時、選択肢は対象になっている。その対象が、決定疑問のその他の部分が指示している対象と一致すればよい。このように理解すれば、決定疑問への答えの完全文もまた同一性文である。

ところで、否定の答えをどう考えればよいのだろうか。

「世界一速く走る人は、ルイスですか」「いいえ」

この答えの完全文は、つぎのようになるだろう。

「世界一速く走る人は、ルイスではない」

これは次のように同一性文と理解するよりも、同一性文の否定と理解するのがよいだろう。

「世界一速く走る人＝ルイスでないある人」

「¬ (世界一速く走る人＝ルイス)」

因みに次のような答えはどう理解すればよいだろうか。

「世界一早く走る人は、ルイスですか」「いいえ、ボルトです」

この答えの完全文は、つぎのようになるだろう。

「世界一速く走る人は、ルイスではなくボルトである。」

「 \neg (世界一速く走る人=ルイス) & (世界一速く走る人=ボルト)」

(3) 問い求められるもの記述句と答えを結合する完全文は、同一性文である。

全ての決定疑問文は、同一性を問う文に書き換え可能である。なぜなら、どのような平叙文でも、疑問文に変形して発話することが可能であるが、どのような決定疑問であっても、その質問の焦点を明確にしたならば、それは同一性を問う疑問文と同義だとわかるからである。したがって、その答えの完全文は、同一性文に書き換え可能である。

例えば、

①「グーグルが来年一月にも日本国内で電子書籍の配信事業を本格的に始める」

の文から任意に二箇所とって、そこに焦点を当てた質問を作ってみよう。

②「(他でもなく) グーグルが来年一月にも日本国内で電子書籍の配信事業を本格的に始めるのですか」

③「グーグルは、来年一月にも日本国内で(他でもなく) 電子書籍の配信事業を本格的に始めるのですか」

この②と③を同一性を問う疑問文にかえると次のようになる。

④「グーグルが、来年一月にも日本国内で電子書籍の配信事業を本格的に始めるところですか」

⑤「グーグルが来年一月にも日本国内でその配信事業を本格的に始めるものは、電子書籍ですか」

④と⑤への「はい」の答えの完全文は、次の同一性文になる

⑥「グーグル=来年一月にも日本国内で電子書籍の配信事業を本格的に始めるところ」

⑦「グーグルが来年一月にも日本国内でその配信事業を本格的に始めるもの=電子書籍」

(注) 決定疑問は、文の真理値を訊ねる問いではない。

もし「SはPであるのか」が「「SはPである」は、真なのか」と同義ならば、決定疑問は文の真理値を訊ねている。しかしこの二つは異なる。前者は、次の二つに区別できる。

「(他でもなく) SはPであるのか」

「Sは (他でもなく) Pであるのか」

この二つの問いの違いは、答えに辿りつくときの、認識プロセスの違いを引き起こす。

これに対して、後者の焦点は、次のいずれかになる。

「「SはPである」は、(他でもなく) 真なのか」

「(他でもなく) 「SはPである」は、真なのか」

つまり、決定疑問は、文の真理値を問うのではない。(ここからの帰結は、真理の余剰説批判である。)

3 まとめ

残されていた主張「(4) (質問以外の) すべての言明は、少なくとも潜在的には、同一性文である。」の証明

完全文が同一性文の形式とるとは限らない。しかし、我々は完全文の焦点に注目して、それを同一性文に書き換えることが出来る。返答が主張していることは、問い求められている指示対象と答えが指示する対象の同一性の主張である。なぜなら、答えが正しいと主張することは、その同一性を主張することだからである。

文がA+B+C+Dという構文からなっているとしよう。決定疑問に関していうと、どの部分に焦点を当てて、決定疑問を作ることもでき、その決定疑問は、同一性を問う疑問文に変換可能である。ゆえに、返答もまた同一性文に変換可能である。

補足疑問文についていうと、A+B+C+Dという構文の文のどの部分がかけても、それを問うことが出来る。例えばBの部分が欠如しているときに、それについて、A+wh+C+Dという質問をしたとしよう。これに対する返答はBであるこのとき、この二つの表現の指示対象の同一性が成り立つだろう。それゆえに、それをA+wh+C+D=Bという同一性文にすることができる。

ちなみに、問いの内容を取り入れて答えを完全な文にしたものが、完全文である。それは直接的な返答の文をそのまま提示するよりも、理解しやすいものになっている。しかし、完全文だけが提示されると、問いと答えの関係が消えてしまうので、どこに焦点があるかわからなくなる。つまり、完全文は、複数の焦点を持ちうる。つまり複数の問いに対する直接的な返答にとっての完全文でありうる。